

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点中間評価結果

機関名	九州産業大学	拠点番号	K28
申請分野	K<革新的な学術分野>		
拠点プログラム名称 (英訳名)	柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム (Program of Kakiemon-style Ceramic Art Research Center)		
研究分野及びキーワード	<研究分野: 哲学>(美術史)(美術諸学)(文化交流史)(芸術研究)(陶芸)		
専攻等名	芸術研究科造形表現専攻、工学研究科生産システム工学専攻、 経済学研究科経済学専攻、国際文化研究科国際文化専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 下村 耕史 他15名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成18年4月現在）を抜粋

<本拠点がカバーする学術分野について>

美学、デザイン学、美術史、陶磁史、日蘭貿易史、分析化学、統計学

<本拠点の目的>

日本が世界に誇る伝統的な文化財である柿右衛門様式磁器は日本陶磁器の歴史的な発展に貢献し、更にオランダ東インド会社により広く世界中に運ばれて尊重され、ドイツのマイセン磁器にみられるように西洋における磁器の発展を促すほどの影響を与えた。しかしその総合的研究は今日までなされていない。本拠点は、柿右衛門様式陶芸研究センターを中心に、柿右衛門様式陶芸について、①意匠研究部門 ②技法研究部門 ③歴史研究・カリキュラム開発部門 の3研究部門からその全体像について解明し、その成果を大学院の陶芸関係のカリキュラムに反映させて、伝統工芸の水準の昂揚を目指す。

<計画・当初目的に対する進捗状況等>

- ① 文様のデータベースの構築と文様データの収録。
- ② 柿右衛門窯に保存されている土型の3次元形状の測定。
- ③ 古九谷様式から柿右衛門様式への移行期の素材を中心とする、初期柿右衛門様式における色絵技術の研究と再現。
- ④ 国内およびドイツとオランダにおける柿右衛門様式磁器の所在調査。
- ⑤ 福岡市美術館と佐賀県立九州陶磁文化館における「柿右衛門様式磁器の普遍性について」をテーマとする国際シンポジウムの開催、により柿右衛門様式磁器に関する総合的研究の推進と国際的なネットワーク形成の基礎を築いた。

<本拠点の特色>

COE事業としての本プログラムの特色は、従来なされなかった柿右衛門様式磁器についての意匠・技法・歴史の3研究部門からの総合的研究にある。その研究成果は平成21年度から開設予定の専門職大学院のカリキュラムに活用され、次代の伝統工芸を担う、高度な技術・専門知識・芸術的感性を持った人材育成を行う。

<本拠点のCOEとしての重要性・発展性>

柿右衛門様式磁器に関する総合的な研究成果を教育システムに活用し、伝統的な技法に現代的感性を活かした新たな陶芸を創造する基盤を創出することに、本プログラムの重要性と発展性がある。当センターにおける研究は、国内外の研究者や陶芸家と連携して進めることにより、本学を拠点とする陶芸研究の国際的なネットワークを形成し、また日本の伝統的な陶芸に対する理解を深め、評価を高めることが期待できる。

<本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果>

- ① 陶芸研究の国際的なネットワークと教育・研究拠点の形成。
- ② 日本の伝統的な陶芸に対する海外の陶芸家や研究者による理解の深化と研究の促進。
- ③ 古陶磁器等の意匠データの蓄積・整理とこれによる陶芸の研究及び陶磁器の意匠技術の発展。
- ④ 伝統的素材・技法研究の発展および若手陶芸家の技能の向上。
- ⑤ 柿右衛門様式磁器の美術史・陶磁史・文化史・経済史的観点からの研究の促進。
- ⑥ 専門職大学院カリキュラムへの研究成果の活用と高度な技術・専門知識を持った人材の育成。

<本拠点における学術的・社会的意義等>

本センターの柿右衛門様式磁器に関する総合的な研究は、これまでの陶磁研究で不充分であった伝統的な技法の科学的・組織的研究を強化した革新的なプログラムである。研究成果を活かし、技術・専門知識・芸術性を兼ね備えた高度な人材を育成し、伝統工芸の水準の昂揚を目指している。

◇ 21世紀COEプログラム委員会における所見

(総括評価)

当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と判断される。

(コメント)

柿右衛門様式を作陶現場との協同で解明しようというユニークな研究であり、日本発信の国際的意義もきわめて大きい。

伝統を整理・継承し、地域の文化を検証する研究として有意義であり、成果に向けて、現段階ではほぼ期待どおりの取り組みが行われている。ただしここでは、研究者・学生と作陶家との間の協調がことに重要であるが、現時点では、それら関係者との有機的な組織化について、やや立ち遅れもみられるので、より一層の努力を求めたい。

意匠・歴史・技法など、対象に向けて広い論点が用意されているとはいえ、なお比較史的・商業史的な分析などの要望も追加することができる。しかしながら、それらすべてを包括したのでは、過度の拡散にいたることも憂慮されるので、達成可能性を十分に考慮したうえで、賢明な研究戦略を策定することが望まれる。

これまで以上に、成果の逐次的発信に努め、各界からのアドバイスをも受容できるように、態勢を整えることも必要である。